

〈研究ノート〉

卒業制作に関する一考察

——ウェディングドレスを中心とするファッションショーを通して——

餅 田 裕 美

A Consideration of Graduation Works

—— Through The Wedding Dress Fashion Show ——

MOCHIDA Yumi

1. はじめに

少子化の大波を受けて、大学・短期大学の入試状況が様変わりし、入学する学生の資質や目的をはじめ、その行動も大きく変化してきている。このような従来と異なる学生に対する大学のあり方や授業内容、学生指導等の教育全般が、今私たち大学・短期大学教員に問われている。そして、教員一人ひとりの教育の成果が学生の評価を受け、受験者数となって社会の評価を受けることとなる。

したがって、大学教育においては、これらの変化する学生の思考方向と行動の特性を知り、的確に学生の興味の対象を把握することによって、教員が誘導的指導を行い、学生に目標・目的をしっかりと持った学習期間を提供し、達成感をもって卒業に向かせることが、学生の満足感と、保護者を含めた社会の評価を得ることに繋がると考える。

そこで本論では、学生が達成感を感じる科目として卒業演習—ゼミナールを取り上げ、筆者が担当するファッションクリエイト系の「服飾構成ゼミナール」における卒業制作の内容を調査し、作品を通しての学生の変化と傾向を把握することによって、学生から評価される卒業制作の指導のあり方を考察していきたいと考える。



写真1 ファッションショー

2. ゼミナール受講者の実態

平成13年から17年までの5年間の、本校におけるゼミナール受講者の詳細を、教務課のデータをもとにまとめ、ゼミナール受講の実情と方向性を考察する。

(1) 調査の対象と方法

平成13年度から17年度までの卒業ゼミナール受講者を対象とした。したがって対象となったのは、平成12年度生から16年度生までである。入学者数は、平成12年度241名、13年度210名、14年度220名、15年度249名、16年度294名の計1214名である。それに対して、卒業ゼミナール受講者数は、平成13年度191名、14年度191名、15年度198名、16年度234名、17年度279名の計1093名である。

(2) 調査の結果及び分析

調査初年度の平成13年度から15年度までの3年間は、本短期大学は1学科3コース制をとっており、服飾科の流れを引き継ぐファッションデザインコースと秘書科を引き継ぐ秘書ビジネスコース、2級建築士を目指す新設コースとしての住生活コースである。

これらの3コースのうち、秘書ビジネスコースは、そのコース全体の性格上、六つの全てのゼミナールが講義を主体とした調査研究に基づく論文発表である。他の2コースは、そのほとんどが実習をとまなうゼミナールである。それぞれの受講者数、及び変動は表1-1、1-2及び図1である。

図1のコース別ゼミナール受講者数は、その年の業界の好・不況の景気動向や世相を、

多少反映した数で推移しているが、概ね13～16年度までは大きな変化はみられない。各コース共、平均化された数字で推移している。しかし、17年度になると全体数の増加という母数の影響もあるが、講義中心のビジネス系が倍増していることは特筆すべき現象である。16年度からスタートした製菓がこの年半減しているのは、ひとつのゼミナールが教員の退職により、やむなく当年度のみ閉講したことによるものであり、特殊事情

表1-1 コース・テーマ別ゼミナール受講者数

コース	実習系	テーマ	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	計
ファッションビジネス		アパレル	2	7	12	13	15	49
	○	ファッションビジネス・プランニング	10	17	17	18	32	94
	○	和裁実習・日本の手の文化（着物）	11	10	11	11	18	61
	○	生活デザイン（織り）	8	3	-	-	-	11
	○	服飾構成	4	13	10	21	16	64
情報・ビジネス		情報検索	18	4	20	-	-	42
		健康	7	18	16	14	24	79
		問題解決	18	14	-	-	-	32
		英語コミュニケーション	18	15	15	11	7	66
		プレゼンテーション・日本語表現	16	14	16	13	14	73
		人間関係論・経営組織論	7	-	-	-	-	7
		英語で話そう・リーダーシップ	-	-	4	2	2	8
		プログラミング	-	-	13	17	41	71
住生活	○	住まいの空間	13	13	11	14	18	69
	○	住生活	10	13	10	15	23	71
	○	調理	19	22	26	-	-	67
	○	生活デザイン	16	8	5	8	10	47
	○	アート&デザイン	14	20	12	16	22	84
製菓	○	製菓	-	-	-	33	37	70
	○	調理	-	-	-	28	-	28
合計			191	191	198	234	279	1093

* 平成16年度、製菓コースが出来、住生活コースの調理が製菓コースに変わる。

* 平成17年度、製菓コースの調理は担当者の退職により、開講していない。

* コース名は平成16年以降の名称で明記してある。

として除外して考察するべきと考える。このように実習ゼミナールに比べ講義ゼミナールが増加傾向にある背景には、実習ゼミナールは実習費が別途必要なことだけでなく、同じ時間で単位が1/2という現実的な理由があることが、学生達の卒業レポートからうかがえる。今後実習系ゼミナールとしてはいかに受講者の減少を食い止めるかが大きな課題となっている。このような中で、「服飾構成ゼミナール」の選択理由を卒業レポートから抽出したものが表1-3である。

表1-2 実習・講義系別ゼミナール受講者数

コース	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	計
ファッションビジネス実習系	33	43	38	50	66	230
ファッションビジネス講義系	2	7	12	13	15	49
住生活実習系	72	76	64	53	73	338
住生活講義系	0	0	0	0	0	0
情報・ビジネス実習系	0	0	0	0	0	0
情報・ビジネス講義系	84	65	84	57	88	378
製菓実習系	-	-	-	61	37	98
合計	191	191	198	234	279	1093

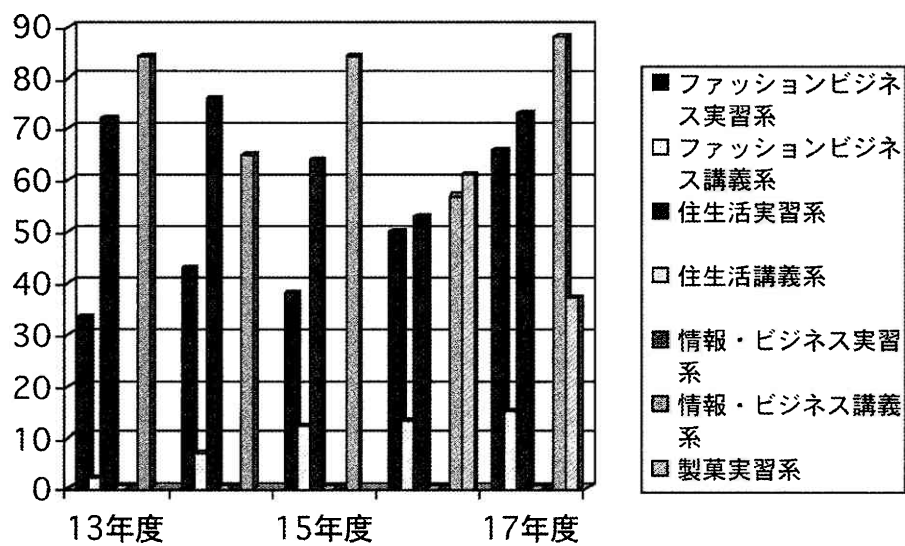


図1 年度別ゼミナール受講者数の推移

表1-3 「服飾構成ゼミナール」を選択した理由

ファッションショーにあこがれて	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩の作品、ショーを観て ・入学前のパンフレットを見て ・オープンキャンパスに来た時から決めていた ・自分たちで作ったドレスでショーをしたい ・ファッションショーに出たい ・ショーのためのドレスを作りたい
ウエディングドレスを作りたい	<ul style="list-style-type: none"> ・白いドレスへのあこがれ・幼い頃にあこがれたドレスを着てみたい ・新しいウエディングドレスを作りたい ・心に残ったウエディングドレスの再現をしたい ・結婚式で着るドレスを作りたい ・結婚を夢見て ・友達のためのウエディングドレスを作りたい
ドレスを作製したい	<ul style="list-style-type: none"> ・洋服について知りたくて ・洋服を作る楽しさを知ったから ・自分らしい（自分だけの）ドレスを作りたい ・女性らしい、可愛らしい華やかなドレスを作りたい ・セクシーなドレスを作りたい ・着たいドレス、着てみたいと思わせるドレスを作りたい ・雑誌のドレスを作りたい ・お姫様のイメージのドレスを作りたい ・母の着物でドレスを作りたい ・自分の体型、サイズに合ったドレスを作りたい
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・この学校に来た意味を残したい ・目立ちたい

3. 服飾構成ゼミナールについて

前述のように、平均して実習系ゼミナールの受講者数が獲得できていたことは、担当者として大変嬉しいことである。2年間という限定した期間の中で、基礎から自分の手で積み上げていく「根気」や「丁寧さ」を培い、作品の完成による「達成感」を教えるには、実習・演習が適していると考えている。この実習の持つ役割を、学生達が持つ夢と共に実行できるように計画し、指導を行っている。しかしながら、現実には近年はほとんどの受

講生が洋裁に関して全くの初心者である。このことが指導上の大きな問題であることはいなめない事実である。したがって、最終目標となる卒業制作も、おのずと以前の服飾科の頃とは比較することが出来ないレベルのものとなっている。



写真2 10年前の作品(平成4年)



写真3 現在の作品(平成17年)

しかし、学生達の興味の時期に合わせて、計画的に根気よく向き合い指導する中で、学生達は徐々に技術を身につけ、制作への意欲が育まれていく。学生達は、卒業作品に時間を忘れて取り組み、その発表の場であるファッションショーで1年半の努力と達成感を身をもって知り、それが感激の涙となるのである。このときの感動が、後述の卒業レポートに熱意をもって述べられている。

一方、大手前短期大学における服飾構成ゼミナールの卒業制作の発表は、歴代ファッションショーである。現在は秋に行われている大学祭のイベントとして実施されている。イベントとしてのファッションショーにおいての発表となるので、学生達は作品として、いきおい華やかなものを選ぶこととなる。その結果は表2の通りである。

針を持つことが初めてに近い立場でありながら、学生達の求めるものは高等技術と知識が必要なドレス制作である。この点からも、多くの学生が求められる技術や知識を考えるとなく、ドレスメイキングそのものを安易にみていることがうかがえる。

表2 卒業作品の種類

服 種	着 数				
	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度
ウェディングドレス	2	6	4	10	10
イブニングドレス	2	4	5	5	4
カクテルドレス	3	2	1	6	1
カジュアルドレス	34	40	51	38	33

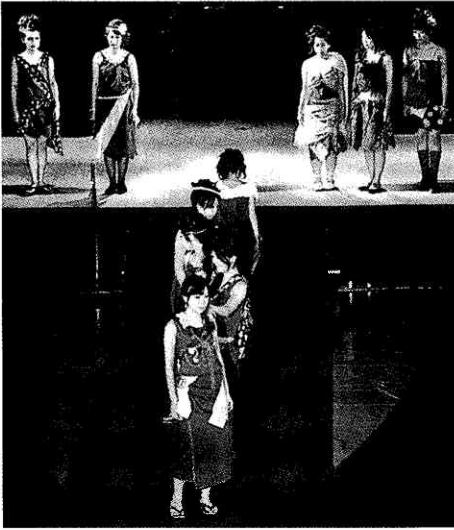


写真4-1 和風ドレス



写真4-2 カラードレス



写真4-3 ファッションショー記念撮影



写真4-4 フィナーレ

(1) 卒業作品とその特徴

表2からも、卒業作品の多くがウェディングドレスとイブニングドレス等の結婚式に関わる服であることが分かる。学生達にとり、究極の服とはウェディングドレスなのである。理想と夢をイメージに、オートクチュールで発表されるウェディングドレスのデザインを思い描いて、卒業制作に向かうのである。

各年の主な作品写真に基づいて、その特徴を述べてみる。

① 平成13年度作品

この年は実質4名という少数のゼミナール生であったが、ドレスに対する思い入れが強く、各人がウェディングドレスに挑戦し、そのデザインもスリムからボリュームのあるものまで、様々であった。

スレンダーなタテ型シルエットで肩を出したマーメイドラインと、オーソドックスな身頃にパニエで膨らんだボリューム型のウェディングドレスは、まさに学生の思い描くウェディングドレスの二極性を現している。



写真5-1 マーメイドライン



写真5-2 細くしたウエストに裾に大きく広がるシルエット

② 平成14年度作品

ゼミナール生は13名で、卒業制作の指導をするうえには適正な人数である。

この年のウェディングドレスの傾向はビュステ型で、肩を出すことにより女性の美しさを求めている。スカート部分はパニエで膨らましてボリュームを出し、裾が大きく広がったシルエットのものが多数を占めている。それらを各人がショーで発表することを念頭に置き、ディテールにおいての装飾やフロント部分はミニにし、後は長く裾を引くシルエット等、個性を表現している。



写真6-1 ビュステドレス



写真6-2 スカートをアレンジして

③ 平成15年度

ゼミナールは友達と一緒にという理由が多い中で、この年のゼミナール生10名は、初めてゼミナールの場での出会い、新たな友情を深めていった。ドレスにおいても、素材はサテン地とオーガンディーという同じものを使用しているが、趣味嗜好の違いがはっきりしており、ディテールの変化で様々なバリエーションを見せている。



写真7 10種のウェディングドレス

④ 平成16年度

この年は21名の学生が受講している。ウェディングドレスへの憧れは人数の分だけ増し、全体に可愛さを前面に押し出したドレスになっている。ウェディングドレス＝お姫さまを連想させるギャザーやフレアーをたっぷりとしたスカートに特徴が表れている。



写真8-1 ショート丈



写真8-2 清楚なイメージ

⑤ 平成17年度

ゼミ生は16名で、その内10名がウェディングドレスを制作している。平成14年度のウェディングドレスと同様に、肩を出したビュスチェに美しさを求め、細いウエストから裾に広がったボリュームのあるスカートと、花やフリル等のディテールに可愛さを求めている。



写真9-1 ディテール



写真9-2 サイドシルエット

(2) ウェディングドレスにみる若者気質

このように5年間のウェディングドレス制作において、その用いる布地は、従来通りの、華やかさを単純に表現できるサテン地であり、デザインはスレンダーな大人の女性を感じさせるマーメイド型と可愛いお姫様イメージのボリューム型に二分されている。ヘッドドレスやブーケ等の小物に多少の変化や個性が表れているが、概ね、変化は見られない。言い換えると創造性がなく、若い頃から描いてきた「夢」としての結婚=ウェディングドレスというイメージで、デザインを考えていることがうかがえる。それは決して自分で考え出したものではなく、情報によりイメージ化されたものである。

したがって、ウェディングドレスに限ってみると、以前の服飾学科時代の作品と、その縫製技術はともかく、デザインにおいては大差が感じられないものとなっている。



写真10 平成4年度ウェディングドレス



写真11 平成16年度ウェディングドレス

つまり、時代は移ろうとも、学生達にとってウェディングドレスは、白に象徴される汚れのなさ=幼く可愛い女の子と、清楚と貴賓=大人の知的な女性、を共通イメージとして延々と受け継がれていく一般化されたデザインの服であると考えられる。

もとより、ウェディングドレスは西洋から入ってきたものであり、キリスト教による

教会結婚式という儀式に関わるものであることは言うまでもない。それ故に神秘と未潔という意味のベールと共に、白が純潔の象徴として定着したといわれるウェディングドレスの歴史的根拠も納得できるが、現代の様々なモード化時代において、憧れとしてのウェディングドレスのみがタイムレスにデザインの創造性の無さを示し続けていることが、ファッションに携わる者としては不思議である。まして、本校学生の日常の服装感覚や行動をまのあたりにしている者としては、ウェディングドレスに対する学生達のオーソドックス性が理解しがたい点である。

4. 卒業制作レポートにみる学生の成長

このように、ウェディングドレスを中心とした卒業制作について、その制作過程からファッションショーの終了までをレポートにまとめあげ、最終講義でそれをもとに発表を行い、ゼミナールのまとめとしている。学生達は、デザインを起想し、デザイン画を描き、製図、材料購入から制作、ファッションショーの企画、シミュレーション、実演に至るまでの全てを詳細に記し、その折々の自分の心境を振り返るのである。このレポート作成と発表が、彼女達にとって負担になっていることは間違いないが、反面、このことが自身の成長に気付く大きなきっかけとなっている。製作途中の心と行動をじっくりと見つめなおすことで、実習で得た「根気」と「協調性」を改めて知り、ショーを作り上げていくときの熱意を思い出し、「達成感」と「充実感」を味わうのである。短い2年間の短期大学生生活の中での大きな糧を実感した学生は、しっかりと地に足をつけて社会へ向かうことが出来ると信じている。以下は、その代表的レポートの一部である。

(1) 作品に関して

- ・最初にデザインしていたものとは変更箇所がいくつもあり、本当に自分の理想を形作り、表現することの難しさを目の当たりに感じた。服に寄せたギャザーや、徹夜してつけたトレーンのレース等は、自分の理想を表現することが出来、言葉では表現しきれないほどの感動がありました。(平成14年度 M.M)
- ・初めは、本当にドレスなんて自分で作ることが出来るのかすごく不安でしたが、出来上がったドレスは、スカートのボリュームと白の生地がとても可愛くて、若さと純粋さをうまく表現することが出来ました。(平成16年度 N.M)

(2) 友情・協調性に関して

- ・最初のほうは自分ひとりでは何も出来ませんでした。でも、その度、皆は丁寧に教えてくれたし、手伝ってもらいました。(平成16年度 A.R)

- ・このドレスが完成することが出来たのも、たくさんの人たちの支えがあったからだと思います。そんな言葉を言いながら涙を流す人の気持ちに初めて共感できました。(平成14年度 H.Y)
- ・製図を書くときや布を縫い合わせるときも、思い通りにいかなくて嫌になっていても、周りの皆がいたからこそ頑張れたと思います。皆の優しさが伝わってきました。(平成16年度 H.M)

(3) 達成感・充実感に対して

- ・あまりにも出来なくて完成できないと思ったけれど、完成したときは嬉しくて泣きそうでした。制作にしろ、ファッションショーにしろ、この達成感と喜びはずっと忘れることはありません。(平成13年度 C.M)
- ・大学生活を振り返ると、思い出すのはほとんどゼミのドレス作りです。ショーも終わってしまって少し寂しいですが、終わったときに起こる達成感とドレスという大きなものを作ったという経験を得ることが出来ました。(平成16年度 Y.M)
- ・この作品を作ったことで技術的なことはもちろん、服を作ることの楽しさ、完成したときの達成感、友達の大切さ、色々なことを学びました。(平成17年度 S.K)

5. おわりに

このように、受講した学生からは自身の成長と達成感からの評価は得られるが、これからゼミナールを選択しようとする学生に対して、この服飾構成ゼミナールに目を向けてもらえる工夫をする必要がある。なぜなら、受講者が潤沢に存在してこそ、ファッションショーにおいても様々な工夫やチャレンジが可能となるからである。十分なゼミナール生を確保するためにも、より多くの学生に目と心に向けてもらわなければならない。

現代の若者気質として、自分にとって面白いこと・やりたいことには目も心も向けるが、しんどいこと・時間が掛かること・費用が掛かること等は避ける傾向がある。したがって目に見えるメリットや、楽しさ・手軽さをアピールすることで、従来の「お裁縫」や「時間がとられる」というイメージの払拭をしなければならない。そして「積み上げていく技術」から「作品作り」へと、指導の仕方を変えていく必要がある。例えば、半製品を用いることも可能であろうし、価格を無視して作りやすい材質を選ぶこともあろう。反対に、実用性を考えず、ショーのためだけの作り捨て資材での作品となることもあろう。

これらの中には洋裁を指導する立場としては本質から離れるものもあるが、現実の学生のニーズとの兼ね合いを推し量りながら、実習ゼミナールの目的を見失うことなく、王道と側道を上手く組み入れて、現代にマッチした「ドレスメイキング」を伝えていきたい。

それはまさに、時を越え変わることなく続くなかで、一部に個性を加える白いウェディングドレスと同様、確固たる実習の基本とコンセプトを持ちつつ、学生の個性を生かす工夫そのものである。

参考文献

- ・田中千代「田中千代服飾事典」同文書院 1969
- ・崎田喜美枝「コンピュータファッションデザイン」宝塚造形芸術大学出版部 1999
- ・笹原紀代「ピンワーク」文化出版局 1989
- ・元井能監修「服装の書Ⅱ」関西衣生活研究会 1992
- ・佐分利貞光編集「衣生活研究」113・114号 関西衣生活研究会 1985
- ・今井朗子・出口由美編集「グレイスフル・ウェディング秋冬」世界文化社 1994
- ・大久保豊編集「SOEN EYE」No.10 文化学園出版部 1993

キーワード：卒業制作、ウェディングドレス、ファッションショー、若者気質、達成感

Keywords：Graduation Works、Wedding Dress、Fashion Show、Youth Temperament、Impression Of Achievement